

# 大学は出たけれど

## ―北インド地方都市の高学歴青年の困難―

佐々木 宏

ずいぶん前のことだが、インド地域研究と関係のない研究会で北インドの家族調査の結果を報告した時、「大学や大学院卒業者が、なぜそんな仕事をしているのか」と質問され、戸惑ったことがある。小さな露店に座る修士号をもった男性や学士号を持つリキシヤワーラー事例についての質問だったと記憶している。私はこれらの事例を当たり前のことと受け止めていたので、返答に戸惑った。おそらく質問者の頭には「小学校すら普及していないインドでは、大学卒はエリートなのでは」という前提があったのだろう。

もちろん、インドの上級公務員やグローバル企業のビジネスマンなどはおしなべて高学歴者である。しかし、高学歴者すべてが学歴相応の職を得ているわけではない。失業やインフォーマルセクターの

仕事を強いられている者も多い。

その理由は簡単で、高学歴者の数よりも彼ら向けの雇用の数が少ないためである。このような大学(高等教育)と雇用のリンケージの不全は開発途上諸国でしばしばみられることであるが、インドの場合、古くから続く社会政策上の課題である。イギリスの社会学者R・P・ドーアは、一九七〇年代のインドを「大学卒バス車掌の発祥の地」と命名した(参考文献①)。ドーアによると同じ現象は英領期にさかのぼり確認できるといふ。彼がインドを論じたのはちよūd独立後の教育普及の影響があらわれてきた時期であり、独立以前からの問題が深まりつつあるというのが彼の指摘であった。

インド労働雇用省による二〇一二年の若者(一五歳から二九歳)調査によれば大学卒者の三人に一

人は失業状態にあるという(同年年齢層の基礎教育修了者の失業率は四%。また若者就労者のおよそ八割は「非正規雇用」、「自営」に従事している)。このように現在の大学生も就職難に直面している。むしろ、問題のすそ野が広がったという点では、より大きな課題となりつつあるといえるかもしれない。ドーアの時代は数パーセントだった大学就学率が今や二〇%を超えているためである。ここでは、現代インドの若者の困難を、北インドの地方都市から報告したい。「若者」とは「若い男性」を指す。むろん例外はあるが、インドの場合、学卒後の就職は男性にとってより大きな意味を持つためである)。

### ●地方の大学の今

筆者は一九九〇年代末から北イ

ンドのウッタール・プラデーシュ州東部の地方都市ワラーナシー(Varanasi)で「貧困と教育」をテーマに調査を続けてきた。二〇〇〇年代の半ばくらいからだろうか、ワラーナシーでは大学が急増し、そうした学校に貧困家族の若者たちも少なからず通い始めている姿が目につくようになった。そこで、彼らの学卒後を探る調査を二〇一〇年に着手した。

これまでの調査結果からいえる結論を先にいえば、高学歴者の失業問題は現在のワラーナシーでも深刻で、若者たちの多くは就職難に直面している。若者たちの姿は次節で紹介するが、その前にワラーナシーの大学の今について説明しておきたい。

インドの大学制度は三年制の学士課程を中核とし、その上に二年制の修士課程と三年制の博士課程が乗る。一つ断っておくと、高等教育機関の種別は正式には「大学/University」(二〇一四年現在、七六〇校)、「独立した教育機関/Standalone Institution」(同、一万二二七六校)、「被提携カレッジ/Affiliated College」(同、三万八四九八校)の三種類あるが、どの学校でも学位(Degree)を得

られるので、( )では一括して「大学」と呼ぶ。

学校数でいえば、大学のなかで最もポピュラーなものは Affiliated College である。University は 2% に過ぎない。ワーカーナシーでも University 相当の学校は、中央政府が管轄する Banaras Hindu University (BHU) 、 Indian Institute of Technology (インド工科大学 Varanasi 校: IIT-Varanasi) 、 Central Institute of Higher Tibetan Studies (州政府が管轄する Mahatma Gandhi Kashi Vidyapeeth (MKV) と Sampurnanand Sanskrit Vishwavidyalaya の五校)、圧倒的に数が多いのは Affiliated College である。また、2000 年代以降の大学増の担い手は Affiliated College であった。

インドの大学といえば、インド工科大学各校 (IITs) やインド経営大学院各校 (Indian Institutes of Management: IIMs) のような、卓越した知の拠点あるいは優秀なグローバル人材を輩出する学校を思い浮かべる方も多いかもしれない。こうした大学の入学難易度は非常に高く、悪名高い受験地獄の象徴となっている。ま

た、それだけに卒業後の就職は良好で、経済成長が生み出した「良い仕事」に直結する学校となっている。さらに、IITs のような政府系大学ではなく、私立名門大学のなかには恐ろしく高い授業料を課すところもある。つまり、優れた大学、学生からみれば価値の高い学歴が得られる大学は、学力や経済力においてきわめて高い参入障壁があるといえる。しかし、そのような学校はそれほど多くない。五万校以上ある学校のなかでも多くてもおそらく数千校だろうか。数千という数は、インド国内の経済誌等が公開する大学ランキングに登場する学校数からの推測であるが、ランク外の大学のなかには、入りやすかつ卒業も簡単だが、その卒業資格は就職を念頭において場合ほとんど価値がないという学校がかなりある。

ここでフィールドに戻ってみよう。ワーカーナシーの大学でランキングに登場するのは BHU の一部の学部や IIT ほか若干の学校である。当然、これらの学校の入学の難易度は高い。また、ランク外でも地元の若者にとつて学力的に入学が容易ではない学校、高い授業料の私立学校もたしかにある

が、それは一部で、大部分は学力と経済力いずれの面からも容易にアクセスできる学校である。この傾向は、特に Affiliated College の人文社会科学系の学士 (Bachelor of Art: BA) コースに強くみられる。これらの学校の授業料 (年額) は、安いところで 1000 ルピー程度、多くの場合は数千ルピー程度 (ワーカーナシーのインフォーマルセクター労働者の月収くらい) とリーズナブルである。また、州政府の給付型奨学金により学費が軽減されている学生も少なくない。さらに、無試験で入学可能な学校も多い。つまり、ワーカーナシーの若者には、学校さえ選ばなければ、高等教育の門戸はそれなりに広く開かれているわけである。

ただし、アクセスが容易な大学は、様々な問題を抱えている。まずは、教育の質に問題のある学校、たとえば学校の怠慢により休講が繰り返される、あるいは施設が非常に貧弱なところがある。また、授業がまったく実施されず、時々の進級・卒業試験だけ行われるといふ、果たしてそれを教育機関と呼んでよいかどうか怪しくなる学校もある。さらに深刻なの

は、このような学校の卒業資格は、労働市場においてほとんど評価されていないことであろう。大学の卒業資格を民間企業がどれほど評価しているかを分かりやすく示すのは、大学における企業による採用イベント (キャンパスセレクション) が行われているかどうかである。ワーカーナシーでキャンパスセレクションが実施されているのは、大学ランキングに登場する学校、専門職業養成校・職業教育系の学校のみであり、その他の大学の卒業生に、ワーカーナシー内外の民間企業はほとんど興味を示していない。

### ●学校と労働市場の狭間で

あえていえば誰にでも入りやすい大学、たとえば Affiliated College の BA コースの修了者は、職業とのつながりが希薄な学歴を持つて労働市場に巣立っていくわけであるが、彼らはその後どうなっているのか。ここでは筆者がちょうど一年前から接触を続けている若者の姿を紹介したい。いずれも政府の貧困対策 (食料や燃料の配給の優遇策など) の対象となる貧困線以下 (Below Poverty line: BPL) 世帯カードを持つ「貧困

家族」の若者である。なお、年齢は初めて出会った時のもので、名前は仮名である。

**【マノージ／二二歳】** 州立大学 MGKV の修士課程人文社会科学コース (MA) 二年の彼と初めて会ったのは、二〇一五年一二月末である。彼は家業を手伝いながら学校へ通っていた。彼の家族の収入と家業のマーラー (花輪) 作り・販売で、生活は楽ではない。マノージが私立 Affiliated College の学士課程 BA コースに入学した際には、自ら携帯電話でアルバイトをし、また親があちこちから借金をして学費を準備したという。ただし、大学三年間の学費一万八〇〇〇ルピーのうち一万ルピーは奨学金でまかなうことができた。また、この Affiliated College は無試験入学だった。学士修了後、公務員 (国鉄職員) 試験を受けるも不合格で、他に仕事も見つからず、別の大学 (州立大学 MGKV) の修士課程に進学した。ここでも奨学金を得ている。

マノージとは二〇一六年九月と一二月の二回会い、その後の様子を聞いている。修士修了後、彼は一旦、デリー近郊の肥料工場の事務職に就いた。MGKV ではキャンパスレクシオンはなく (学士を得た Affiliated College にも企業の求人はいなかった)、この職は親戚から紹介されたものである。ところがマノージはこの仕事を数カ月で辞め、帰郷する。給料がまったく支払われなかったためである。帰郷したばかりの九月に会った時、彼は家業を手伝いつつ次の仕事を探していたが、なかなかみつからないという。そこで、Industrial Training Institute (ITI、職業教育学校) への進学を検討していた。ITI は基礎・中等教育修了者向けの学校で高学歴者向けではないが、キャンパスレクシオンがあり就職のチャンスは大きい。ただし、若者に人気のある政府系 ITI は彼の成績では入学が難しいので、私立 ITI を考えているが、高い学費をどう捻出するかが悩みの種だといっていた。

二〇一六年一二月に再会した時、マノージは地元のマイクロファイナンス会社に勤務していた。一月に就職したばかりだという。農村を巡回し貸付や集金をする仕事で、月給は七〇〇〇ルピーほどである。この職もまた親戚の紹介だった。今回の職にはマノージはそれなりに満足していた。ただし「ずっと続けるつもり」と問うと、今の仕事は公務員 (初任給はマノージの給料の倍以上) に比べて条件が悪いので、今後も公務員試験を受け続けるといふ。実際、翌一月に予定されている公務員試験にエントリーしていた。また私立 ITI 進学の見積もりも捨てていなかった。

**【ラフル／二三歳】** 私立 Affiliated College の BA 三年の彼と出会ったのも二〇一五年一二月末である。マノージと同様、その後、二〇一六年九月と一二月に接触した。ラフルの家族も家業のマーラー作り・販売と荷運びの日雇いをする父が家計を支えているが、マノージの家族よりもさらに生活は苦しいようである。彼の父はアルコールとドラッグで体調を崩し十分に働けず、ラフルが事実上の稼ぎ手となっているためである。実は、ラフルが子どもの頃から家計は父の浪費により厳しい状態だ。彼は小学生の頃から日雇い仕事をしていたという。大学進学後も建設現場などで日雇いを続け、一日三〇〇〇ルピー程度稼いでいる。むしろ、彼は家業の重要な担い手でもある。

中等教育修了時、ラフルは政府系 ITI に願書を出したが不合格となった。私立 ITI は年間の授業料が二万五〇〇〇ルピーかかると知り断念し、近所の私立 Affiliated College に無試験で入学した。ラフルがこの学校を選んだ理由の一つは、授業料さえ納めれば授業に出席しなくとも卒業できるためだったという。実際、日雇い仕事や家業が忙しく、あまり学校には出席していない。この学校の授業料は年間五〇〇〇ルピーだったが、一年分は奨学金でまかなっている。二〇一五年一二月末に出会った時は、卒業を見据えて、公務員試験、大学院への進学、民間の職探し等を考えていた。彼が通っていた Affiliated College には企業の求人はまったくきていない。

二〇一六年一二月に再会すると、彼は家業と日雇い仕事で家計を支えていた。卒業後、公務員試験は不合格で、他の仕事もなく、進学はお金の問題で断念したという。今後の展望を聞くと、公務員試験は受け続けるがおそらく合格しないだろうから、今の状態が続くのではないかとのことであった。公務員試験は倍率が軽く一〇〇倍を超える狭き門であり、公務員試験

予備校で勉強をする余裕が時間的にも経済的にもないことが、彼が語るその理由であった。

### ●研究や政策上の論点

マノージとラフルはとりたてて変わった若者ではない。調査で出会うワーラーナシーの若者たち、とりわけ学力的にも経済的にも学位取得がそれほど難しくない大学の学生たちの多くは、学卒後、学校と労働市場の狭間でさまよっている。大学を卒業しても相応の仕事がなく、大学院や他の学校（時に民間の疑似ホワイトカラー職）を転々としながら望む仕事との出会いを待つ若者の典型がマノージである。また、そのような「待機」をする余裕がない者は、高学歴を持ちながらも、基礎教育修了者でも就ける家業やインフォーマルセクターの仕事に従事している。その典型がラフルである。そして、二人がBPL家族出身だという点も重要であろう。高学歴者の就職難は大学進学率が低い時代は少数者に限られた経験であった。ところが大学がある程度普及した北インドの地方都市では今や貧困家族にまでその野を広げている。マノージらのような青年期の過ごし

方が、次第に多くの若い男性の経験になりつつあるわけである。

最後に、こうした若者たちの姿が研究や政策に対してどのような示唆を与えてくれるのかを整理しておきたい。まずは、教育と雇用のリンケージの不全の改善こそ、教育政策と労働政策の喫緊の課題であるという点である。インドの大学は現在、地方都市の貧困家族出身の若者にまで門戸を開きつつある。その点で量的普及には成功しつつあるといえる。しかし、かねてよりあった労働市場との接合の不具合は、より深刻な形で顕在化している。インド政府は二〇二〇年までに大学進学率を三〇％とするという数値目標を掲げた。今後も積極的に量的普及をすすめるうとするならば、高学歴者の失業問題は、ますますその存在感を大きくすることとなるだろう。

次いで、インドの若者論における検討課題も示唆しているように思う。既にお気づきの方もいるかもしれないが、この短文のタイトル「大学は出たけれど」は小津安二郎監督の映画（一九二九年公開）から借りた。大学の普及がある程度進んだ昭和初期の日本でも高学歴者の失業が社会問題となった。

この問題は、その直後の戦争特需、そして戦後の高度経済成長により一旦消えるが、近年、低成長や非正規雇用の増加現象と絡みながら再び顕在化しつつある。実は、筆者はフィールドでマノージやラフルたちと話をするたびに、日本の戦前や現代の「就職できない若者たち」イメージとのギャップを感じる。それは、日本の若者たちの内面や外からの評価の基調にある悲壮感がマノージたちの日常には感じられないことである。この「就職できない若者たち」のニュアンスの違いは、おそらく日本とインドにおける「若者の自立」のニュアンスの違いに起因するものと思われるが、今のところ研究はあまりすすんでいない（この点に関する近年の興味深い研究として参考文献②をあげておく）。

三点目は筆者の関心である「貧困と教育」に関わる論点である。開発研究では、学校教育を長く経験することは階層上昇（脱貧困）に正の影響を与えると一般的に言われている。このことはインドでもマクロな観点からいえば正しい。しかし、マノージらの姿からは、学校教育のあり方次第では、必ずしもそうではないことがうかがえ

る。ワーラーナシーのように、大学制度が階層上昇に資するパスとそうではないパスに分断されている場合、後者は貧困家族の子どもたちの脱貧困の努力を吸収し、行き詰らせる袋小路となる。たとえば、ラフルは日雇いの労働をしながらの苦学の末、大学にたどり着くことができた。しかし、この苦学の成果はまったく報われていないし、今後も報われることはなさそうである。大学と雇用のリンケージの不全は、教育制度と労働市場という二つの大きなシステムにかかわる問題なので一朝一夕に解消されることはないと思われる。ならば、そのことを前提にした脱貧困支援の検討も必要となろう。

（とささき ひろし／広島大学大学院総合科学研究科准教授）

### 《参考文献》

- ①ロナルド・ドーア著、松居弘道 訳『学歴社会 新しい文明病』岩波書店、一九七八年。
- ②クレイグ・ジェフリー著、佐々木宏・押川文子・南出和余・小原有貴・針塚瑞樹訳『インド地方都市における教育と階級の再生産——高学歴失業青年のエスノグラフィ——』明石書店、二〇一四年。